



2016年1月22日

プレスリリース

教皇フランシスコ、ユスト高山右近の列福を承認

いのちをかけて神の愛をあかしたキリシタン大名

教皇フランシスコ (Franciscus) は、1月21日、キリシタン大名として広く知られるユスト高山右近 (以下右近、1553-1615) を殉教者として正式に認定し、福者の列に加えることを承認する教令 (decretum) に署名しました。約70年にわたって日本の教会が悲願とした右近の列聖を求める運動は、今、その直前の段階である列福を実現させました。なお列聖申請者は、カトリック東京大司教 岡田武夫。

列福は、聖人の認定の前に必ず経る段階です。列福を公式に宣言して祝う列福式の日取りと場所、毎年記念日は、教皇庁と日本カトリック司教協議会 (会長：岡田武夫 東京大司教、所在地：東京都江東区潮見 2-10-10) が協議のうえ、後日、決定します。

カトリック教会は、イエス・キリストが宣べ伝えた神の福音を信じ、神に従って生き、その信仰が多くの信者の励みと模範になる人びとを、信仰をあかしする聖人・福者と宣言し、その生き方に倣うよう奨励します。聖人は、その記念日が全世界の教会が行う公式の礼拝において記念されます。これに対し、その前段階である福者は、その人ゆかりの国の教会で記念されます。

右近は、1553 (天文 22) 年、摂津の国 高山に生まれました。信長の死後、豊臣秀吉に仕え、多くの武勲を立てました。しかし、棄教を命じる秀吉の命に従わない右近は、1587 (天正 15) 年、明石城主を改易されました。ついで 1614 (慶長 19) 年、江戸幕府のキリスト教禁教令によって、他の信徒や宣教師らとともに、フィリピンに流されます。翌 1615 (慶長 20) 年 2 月 3 日、右近は、神にこよなく愛され、信仰を生きぬいたその生涯を閉じました。享年 63。

時は、物質的な豊かさや名誉、権力を求めて、人びとが必死に競った乱世。望めば、それらを手にする地位にあった右近は、しかし、人間を真に幸福にするものは何かを問い続けました。そして変わらぬ幸福を保証するものは、目に見える栄華ではない、目に見えない神の永遠の愛といのちであることを確信するに至ったのです。人生を左右する重大な岐路で右近が迫られる選択は、目に見える栄華を取るか、目に見えない真の愛を取るか、その二者択一でした。その選びを重ねるごとに、右近は、目に見える形では、どんどん貧しくなっていきます。しかし、自由になった右近のころは、ますます豊かになり、喜びで満たされていったと言われます。こうして右近は、大名の地位も、そしていのちまでも捨てて、真実の幸福を得、それをあかししました。いのちを懸けるあかしこそ、福音が信じるに足ることの証明になります。このような右近の生き方は、現代に生きる人びとを照らす光になることでしょう。

この件についてのお問い合わせ先

日本カトリック司教協議会 列聖推進委員会
事務局: 平林冬樹、事務担当: 寺村淳子
電話: 03-5632-4445 (祝・土日除く)、携帯: 090-4381-6264
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
電子メール: pcb01@cbcj.catholic.jp

右近の列聖運動の経緯

1. 列福運動の始まり

ユスト高山右近 (以下右近) がフィリピンに到着したとき、その聖徳に対する名声は高く、死後すぐに、列聖運動が起こりました。宣教師として来日し、右近と親交を結んだスペイン人のイエズス会員ペドロ モレホン神父(Pedro Morejón, 1562-1639)は、右近の列聖審査を視野に、必要な資料を準備しました。その記録は、同師の手になる「日本殉教録」に記載されています。これらが、近年の列聖運動の基礎資料になりました。

右近の逝去直後に起こった列聖運動でしたが、その後、鎖国状態と禁教政策が進む日本から必要な資料を手に入れることができなかったことなどが起因して、調査の続行が困難になり、列聖運動は、いったん終息しました。

時は移り、1940年、マニラ大司教は、右近の列聖を教皇庁に申請できる権利(管轄権)を当時の大阪教区に委譲しました。

2. 証聖者として列聖を申請

第二次世界大戦終結後の1949年5月、右近の列聖申請を行うための全国組織が東京教区内に置かれました。1964年、右近の列聖申請のための正式な歴史調査を行う委員会が、大阪教区内に設置されました。同調査は、その後日本カトリック司教協議会の殉教者列福調査特別委員会(現 列聖推進委員会)に引き継がれ、1986年4月18日付けて、右近の列聖を証聖者として申請する資料が、ローマの列聖申請代理人に提出されました。同代理人は、日本側の調査資料を、教皇庁列聖省に提出する正式な列聖申請書に整える作業を進めました。そして1994年6月8日、教皇庁列聖省は、右近の列聖手続きが適正に行われていることを認証し、右近に「神のしもべ」の称号を与えました。

その後、教皇庁列聖省の審査に要する歴史関連資料の改訂を重ねるいっぽう、証聖者としての列福に必要な奇跡の報告を待つことになりました。

3. 列聖申請事由を殉教者に変更

証聖者とは、殉教によらなくても、その生涯をとおして信仰のあかしを立てた人です。殉教者は、反対者の手により、信仰のために直接殺害されることで信仰をあかしする人たちです。右近は、直接処刑されたのではなく、流配の地マニラで病死しました。そこで日本の司教団は、右近を証聖者として列聖の申請を行いました。証聖者での申請の場合、列福のために、重篤な病気の治癒などの奇跡を待たねばなりません。

こうして日本の教会は、一日も早い列福の実現を願い、右近の取り次ぎによる奇跡を求めています。その後、2011年7月、列聖省長官アンジェロ・アマート枢機卿は、右近の列聖事由を殉教者に変更しました。信仰を理由に直接、殺害されていなくても、右近は劣悪な環境にあつて最後まで信仰を守った事実が殉教と認められたのです。殉教者の列福には、奇跡を必要としません。申請書類の審査だけで右近の列福が実現することになったのです。この決定に従い、当委員会は、右近の列聖申請事由を証聖者から殉教者に変更し、列聖申請書の内容を改訂する作業に入りました。そして2012年12月3日、当委員会は、列聖申請書の改定に必要な600ページにのぼる資料と図版をローマの申請代理人に送付しました。

4. 教皇による列福の承認

2014年7月15日、ローマの列聖申請代理人アントン・ヴィットヴェル師は、上記の資料に基づいて作成した正式の列聖申請書を列聖省に提出しました。2014年12月2日、教皇庁列聖省 歴史専門部会、翌2015年6月16日、同神学専門部会、それぞれが、右近の列福を可決。列聖省を構成する高位聖職者による通常会議の最終審査を経て、今回、教皇の承認を得たものです。

右近の列福の意義

ユスト高山右近 (以下右近) が生きた 16~17 世紀初頭は、長く続いた戦乱がようやく収束して国が統一に向かう時代です。商業活動が活発化し、金鉱や銀鉱の発見などを背景に外国貿易が盛んになりました。経済的にも文化的にも活気溢れる雰囲気の中で、人びとは、知恵と才覚さえあれば、誰でも目に見える繁栄や権力、名誉が手に入るという夢をもてました。その気になれば、上を目指せる時代だったのです。

そのような時代に、右近はキリスト教の信仰に出会いました。右近は、まさに上を目指す戦国武将たちの世界に生まれ育ち、社会の中で認められる富や権力や名誉が、じつは、はかない、一時的なものに過ぎないことを見抜きました。右近は、実力派の大名と目される人物でしたが、絶えず上を求めるパワーゲームを離れ、人間を真に幸福にする信仰の道をあえて選び取ったのです。どのような人でも、無条件に愛される価値がある。その根拠は何か。右近は、人の価値は、才能や知識、能率・効率、業績によるのではなく、無条件に神から愛されている事実によることを、イエス・キリストが伝えた福音から学び取ったのです。右近の生涯は試練の連続であり、追放に追放を重ねる生活を余儀なくされました。地位も名誉も失い、流浪の生活が続き、ついに祖国を追われても、右近は神だけに愛される幸せを生き抜きます。神への信仰は、理論で理解できるものではありません。いのちを懸けた証しがあってこそ、信じるに足ると納得できます。殉教者のあかしがあってこそ、福音宣教は可能になるといっても過言ではありません。

現代は相対的価値観に支配され、信念を貫いて生きることが困難な時代です。そして、さまざまな生き方の選択肢を用意する現代、才能や能力の有無という価値観で負け組・勝ち組を振り分けようとする時代にあって、右近は、人間の救いはイエス・キリストの福音によると信じ、何が真の人間の価値であるか、何が人間を真に幸福にするかを見抜き、それに向かって主体的に自分の生き方を選び取り、どのような状況に置かれても、神と人への愛を選びの基準にする道を示しました。右近は、ぶれることなく、一つのことを選び続けたのです。右近が選び続けた道は、福音を聞いて神に従う生き方です。

右近の列福を機に、日本の教会は、右近があかしたイエス・キリストの福音は、確かに信じる価値があり、現代社会に大きな光をもたらすことを力強く訴えていけるでしょう。

右近関連年表

- 1543 (天文 12) ポルトガル船が種子島に漂着、鉄砲を伝える。
- 49 (天文 18) フランシスコ・ザビエル来日、キリスト教を伝える。
- 53 (天文 22) 彦五郎 (後の右近) 摂津国三島郡清溪村高山に生まれる。
- 60 (永禄 3) 室町幕府、宣教師ヴィレラに畿内の宣教を許可する。
- 63 (文禄 6) 肥前の大村純忠、洗礼を受け最初のキリシタン大名となる。父飛驒守が洗礼を受けダリオと名のる。右近、沢城にて洗礼を受けユストと名のる。他にも、ダリオ夫人、家臣など 150 人が洗礼を受ける。
- 68 (永禄 11) 飛驒守、摂津守護和田惟政より芥川城を授けられる。
- 69 (永禄 12) 織田信長、ルイス・フロイスに京都宣教を許可する。
- 71 (元亀 2) 高山氏、高槻に移る。
- 73 (元亀 4) 和田惟長、高山父子暗殺を計る。飛驒守、高槻城主に。まもなく隠居して宣教に献身。右近、高槻城主となり荒木村重に属す。
- 74 (天正 2) 右近、摂津余野の黒田氏の娘ユスタと結婚。高槻に天主堂を建設。
- 75 (天正 3) 京都の教会 (南蛮寺) 建立。
- 76 (天正 4) オルガンティーノ神父を招き、盛大に復活祭を祝う。
- 77 (天正 5) 一年間に 4 千人の領民が洗礼を受ける。
- 78 (天正 6) 荒木村重、織田信長に謀反。右近、高槻城を開城。豊後の大友宗麟が洗礼を受け、キリシタン大名となる。
- 79 (天正 7) 村重側についていた父飛驒守、柴田勝家預けとなり北庄 (福井) へ。
- 80 (天正 8) 安土城築城に伴い、安土セミナリオ (神学校) 建設。
- 81 (天正 9) 巡察師ヴァリニャーノを高槻に迎え、盛大に復活祭を祝う。
- 82 (天正 10) 本能寺の変。山崎の合戦で先陣。4 千石を加増される。安土セミナリオを高槻に移す。父ダリオ、高槻に戻る。天正遣欧使節がローマへ出発。
- 83 (天正 11) 賤ヶ岳の合戦。秀吉方で出陣。佐久間盛政に敗北を喫す。大坂城築城にあわせ、大坂南蛮寺 (教会) 建設。小西行長、黒田孝高 (如水)、蒲生氏郷ら受洗。
- 84 (天正 12) 小牧・長久手の合戦に参加。
- 85 (天正 13) 根来・四国平定に参加。武功を挙げ、播州明石に転封。明石教会建設。
- 86 (天正 14) イエズス会日本準管区長ガスパル・コエリョを伴い大坂城で秀吉に謁見。
- 87 (天正 15) 秀吉の九州平定に参加。秀吉のバテレン追放令により、右近の領地没収、追放。小西行長により小豆島にかくまわれる。大村純忠、大友宗麟死去。
- 88 (天正 16) 小西行長とともに南肥後へ。秀吉の命令で前田利家預けとなり金沢へ。利家、右近を客将とし、その保護のもと茶人として活躍。宣教活動へと入る。細川忠興夫人玉子受洗、細川ガラシアと名のる。
- 90 (天正 18) 小田原攻めに出陣。武功を挙げる。
- 91 (天正 19) ヴァリニャーノら秀吉に謁見。
- 92 (天正 20) 秀吉、朝鮮半島侵略 (文禄の役)。
- 93 (文禄 2) フランシスコ会の宣教師来日。大友義統、朝鮮の役の失敗で改易。

- 95 (文禄 4) 父ダリオ死す。長崎に埋葬。
- 96 (慶長元) 土佐浦戸でスペイン船サン・フェリペ号事件が起こる。
- 97 (慶長 2) 長崎で 26 聖人の殉教。秀吉、二回目の朝鮮半島侵略 (慶長の役)。
- 98 (慶長 3) 秀吉、病で死去。
- 99 (慶長 4) 前田利家死去。右近、金沢城を修築。
- 1600 (慶長 5) 細川ガラシヤ、人質を拒否して死す。関ヶ原の戦い。利長に従い大聖寺城を攻略。小西行長処刑。
- 02 (慶長 7) ドミニコ会、アウグスチノ会の宣教師来日。
- 05 (慶長 10) 金沢に教会建設。
- 08 (慶長 13) 金沢でクリスマスを行う。日本とオランダの国交が始まる。
- 09 (慶長 14) 利長の命で右近、高岡城を築城する。
- 12 (慶長 17) 岡本大八事件が起こり、家康の教会不信が高まる。
- 13 (慶長 18) 伊達政宗の家臣・支倉常長、ヨーロッパへ派遣される。
- 14 (慶長 19) 江戸幕府、キリシタン禁令を発布。右近一家、金沢を出て大坂から船で長崎へ。長崎からジャンク船でマニラへ。マニラで大歓迎を受ける。
- 15 (慶長 20) マニラ到着後 40 日ほどで熱病にかかり、2 月 3 日死去。マニラ市により盛大な葬儀が行われ、イエズス会聖堂に葬られる。享年 63 歳。